

会員の広場



社会人から大学院生へ、そして過程を終えて

——65 歳からの人生——

東京都社会保険労務士会常任理事 浅岡 純朗

はじめに——この世に生まれてきた甲斐

人生 50 年時代の人生設計は 2 段階でよかった。親がかりの 1 段階目、独り立ちする 2 段階目、それに短い老後があって、大方の人生は完結した。今や人生 80 年の時代となり、多くの人々が 3 段階目の人生設計を真剣に考えなくてはならなくなった。

子どもには成長したら何になりたい、何をしたいという夢があるし、成人の時代には家庭を持ち、職場では地位の向上などを目指す。いずれの時代にもはっきりした指向というか気流があるが、老後にはどうか。今日、男女ともに持つに至った 20 年程の長い老後を積極的に生きることができようか。

そこで、老後をいくつかの視座から眺めてみたい。①収入は現役の働きに依拠する年金に頼る、②学校教育はおおかた終了、③身体的成長はもはや望めず、④扶養も核家族化の影響で社会化されている。

これらの特徴から垣間見えてくる老後の指向・気流として、①次世代の役に立つ、②受身でなく自主的に学習する、③心身の無理を避ける、④元気な人は介護する側に回る、等々が求められるだろう。要するに、老後の過ごし方の要諦は、「生涯学習」と「ボランティア」に行き着く。

事情があって大学に行けなかった人を含め、大学を卒業した人も大学や大学院に入って学び直す。大学にはこうしたニーズに適合する拡張運動を望みたいし、少子化で疲弊しつつある大学を再生させることにもなる。また、ヤング・オールドがボランティアの中核となることができれば、若い労働力を高齢者の介護に費やさないですむ。

古希を過ぎ、「老後の生き甲斐」というものについて見えてきたことがある。これまでそれは、子供時代の「学び甲斐」、成人時代の「働き甲斐」に並ぶ 3 番目の甲斐と思っていた。ところが、「老後の生き甲斐」は他の二つの甲斐の底流として既に潜んでいて、それが老後に表立ってくるものらしい。団塊の世代が退職期を迎え、生涯学習に意欲を持つ 60 歳代の人が増えている、という。健康・スポーツ・趣味などのほか、身に着けた知識・技能・経験の社会的再評価を望んでいる。これこそが「老後の生き甲斐」の真髄であり、「学び甲斐」「働き甲斐」を感得した人にして初めてこれも感得できるのだと思う。この三つの甲斐の関連を、次のように整理しておきたい。

少々哲学めくが、これまで述べてきた三つの甲斐は、結局、標題の「生まれてきた甲斐」としてとることができるだろう。そうすると、その先に「死にゆく甲斐」というものも想定される

のではないか。その概念は、まだ思い付きに過ぎないが、「生まれてきた甲斐」の具体的な成果を次の世代に引き継ぐ喜びのうちに確認されていくもののように思われる。

1. 大学院への進学——ライフワークとしての和歌文学研究

この社会においては、何らかの事情や理由により人生の途中で中断ないしは放棄せざるを得なかった研究テーマへの執着を持ち続け、いつの日か環境が整ったならば再びそれを学習したいという欲求が心の奥深く眠っている人も決して少なくなかろうと思う。

筆者の場合、それは、和歌の研究及び実作だった。両親と早くに死に別れ、弟妹を養育するために仕事につかなければならなかったから、学生時代に関心を持って創作・投稿していた和歌は、早々に打ち切るところとなった。代わりに、仕事上必要な法律・コンピュータに関する勉強に没頭したが、いつかは再びこの世界に戻ってくることを心底に秘めていた。30 年余り勤務した役所等をリタイアし、年齢も 65 歳を過ぎて、いよいよライフワークに取り組みなければ、死に際して悔いることになると考えたのだ。

私の場合、ライフワークは和歌の実作と研究である。和歌に関心を持つようになったのは、小学 3 年生時代にさかのぼる。東京大空襲の直後、横浜から湯河原に疎開し、引き続き疎開先の湯河原小学校に通っていた頃、それは、教頭の細谷先生から授けられた写生歌一首に胚胎したように思う。

相寄りて 小さき花の咲きにけり 深山りんどう 愛らしくして

60 歳を超えて知ったことだが、中・高に進んだ後に作り続けた作品の多くが、当時の GHQ ((総司令部)を経由してアメリカの国立公文書館に保管されていることが判った。この奇跡的な出来事も和歌への関心を刺激した。そして、今さらに、後に研究テーマの導き手として、和歌の「三句切れ」や句末の「接続助詞で・して」がこの一首に含まれていることに気付いたときは、我ながら驚倒したものだ。

2. 研究テーマ、和歌における文の構成に関する考察の深化

数年間の実作体験を経て、和歌への関心は深まっていき、次のように、徐々に研究テーマとして深まっていった。以下、拙論を中心にしてたどっておく。

(1) 卒業論文——接続助詞「て」から見た短歌の文体的変遷に関する一考察

(1971. 1 東京都立大学国語国文学会『都大論究』第 9 号)

1) 和歌の文体的変遷——短歌形式への特化

和歌の形態的な変遷をたどると、『万葉集』では 4517 首のうち長歌 264 首、施頭歌 63 首、その他 1 首が含まれているが、『古今和歌集』では 1100 首のうち長歌・施頭歌あわせてわずか 9 首となり、『新古今和歌集』となると採録された和歌の全数が短歌だった。和歌の歌体を一般化すれば

(5 音+7 音) × n+7 音 (ただし n =1、2、3 - - -)

と規定することができ、n の値が 1 は片歌、その繰り返しは旋頭歌、n の値が 2 は短歌、n の値が 3 以上は長歌となる。つまり和歌には沿源的・構造的に五・七音の繰り返し機構が内包されていて、後代、和歌といえは短歌のみに形式が限られてきたことは、結果として五・七音の繰り返しが一回を超えては不可能になったことを意味すると考えた。

2) 短歌の文体的変遷——句の切れ続き

短歌の文体的変遷では、句の切れ続きを問題とした。

ア、句切れの頻用——二句単位から「句単位」へ

短歌形式の和歌が本流となっていく過程で発現する『古今和歌集』の短歌の三句切れ、『新古今和歌集』の短歌の初句切れ、三句切れは、前述の五・七音の繰り返しの減少という傾向の延長上で説明することができる。すなわち初句切れでは初句の五音を次句の七音から、三句切れでは三句の五音を次句の七音から切り離すことによって、短歌に残されていた五・七音の繰り返しが不可能としたもので、このことは、短歌における文の構成を「五・七音」の 2 句単位から「五音または七音」の句単位に変容させたことを意味する。

イ、句の終わりの接続助詞の多用——とくに第三句の終わりの「て」

短歌における文の構成が、五・七音の 2 句単位から五音または七音の句単位に変容する一方で、短歌の一般的通有性(自然の発想のままの順序どおりに、句切れなしに表現すること。松田武夫氏)を保持しようとする動きもでてくる⁽¹⁾。各句(とくに第三句)の終わりに現れる接続助詞「て」は、その動きを暗示している。その大きな流れは、『古今和歌集』の短歌では順態接続の接続助詞「ば」が多用されたのに、『新古今和歌集』の短歌では叙述を続ける接続助詞「て」が多用されたところに顕現している。

(2) 修士論文——古典和歌の句切れ法と句のおわりに現れた接続助詞「て」に関する一考察
(2008.3. 紀尾井生涯学習研究会：上智大学・『生涯学習フォーラム』第 10 巻 第 1, 2 合併号「修辞法から読み解く和歌史—古典和歌の句の切れ続きに関する一考察」)

この論文は、卒論のテーマを『万葉集』及び「八代集」まで拡大・渉猟し、その成果を「短歌における句切れの認定基準私案」としてとりまとめたものだ。

解釈文法としての句切れとその認定基準との間に、解消されるべき多少の論理的矛盾が存在することを指摘した。通説は、①句切れとは「第五句(結句・末句)以外の句の終わりに意味上の切れ目があることをいう。」、②その認定基準として「さまざまあるが、文法的に見て句が切れているものだけに句切れを認めるという立場が、客観的な態度として望ましい。」とするが、実際の認定では、①と②との間で微妙な違いを生ずる場合が少なくない。例えば、単純接続の接続助詞「て」によって続けられる前の句と後の句が、意味上は相互に独立していても、接続助詞「て」があるばかりに句切れが認定されないし、逆に一定の解釈的操作を加えないと意味上の切れ目が確認できないのに、終助詞など文法的には句が切れているとして句切れを認めている例が見

られる。

そこで、①については文論上の整理として核文（大久保忠利氏）の成立と独立が確認できれば「意味上の切れ目の十分条件」が満たされるとし⁽²⁾、②については語論上の整理として句の終わりに用いられた連体止め、連用中止法(接続助詞「て」を伴うものを含む)を加えることとした。さらに、「意味上の切れ目」すなわち文論上の「文の切れ目」は、「文の切断（終止、中止、中断）」を含む単位文 1 文につき 1 回以内に限定、「切れ目」の位置は原則として「文の切断」を含む単位文の直後かつ引き続き後文の直前とするが、例えば当該単位文の主部（主語）か倒置表現などにより引き続き後文の主部（主語）と重複するような場合には「文の切断」の直後とするなどの補正を加えて認定基準私案とした。この私案を『後拾遺和歌集』の短歌について試験的に適用し、相応の成果が得られた、と考えている。

ちなみに、主査の半田公平教授(故人)から「和歌史の区分において後拾遺集が一つの切れ目、屈折点と認められることについて、句切れ等の問題について適用し、一応の成果が得られ、証明することができたことは評価に値する。労作である。今後の課題として、十三代集の和歌について、玉葉、風雅の研究を進めるとのこと、今後を期待するものである。」との講評をいただいたのは、嬉しく励みとなった。

(3) 博士学位(申請)論文—和歌における文の構成に関する考察(句の切れ続きと歌風の展開)

平成21年度後半、主査の鈴木日出男教授から勧められて、平成22年度に大学院博士後期課程に再入学し、いわゆる「課程博士」に挑戦することになった。

この論文は、修士論文のテーマを深化させたもので、以下の3点が研究上のポイントとなった。

①句の切れ続き

句切れの多用がともすれば和歌表現の流れを切れ切れにしかねないとする、句切れと同程度の頻度で短歌の句の終わりに用いる接続助詞「て」は、文の意味としては切れたものを文の形式としては続けていくという語の性質に着目して、一首の連続性を保つために好んで用いられたのではないか、すなわち短歌の「切れ」と「続き」との間にはかなりの程度でせめぎ合う関係があるのではないかということをも関連分析の手法を用いて論述した。

②歌風の展開

万葉歌風、古今歌風、及び新古今歌風はそれぞれに独自性をもつとするのが通説であるが、かといって各歌風が唐突に出現したとは考え難い。まず一つの歌風が確立され、やがて次の歌風の確立に至ったとすると、その間に、前者の歌風が連続する時期と後者の歌風に転換する時期のあることが推測される。この連続と転換の実態を、表現技法(句切れ、結句の係り結び、体言止めに限定)の援用状況から客観的に推定し、転換前の短歌とそれを本歌とする転換後の短歌との間に、区別されるべき印象があるかどうかを検証する必要があった。

最終的には、この分析手法を、「新古今の緻密と万葉の純粹を併せ持つ」（次田香澄氏）、「一つの究極の歌風」（岡野弘彦氏）とされる京極派歌風の展開に適用して、新古今歌風の連続と京極派歌風への転換の実態を明らかにしたいとした⁽³⁾。

③古今歌風の連続と新古今歌風への転換

このテーマについては、先行研究として、『拾遺和歌集』を「三代集の達成」とする小町谷照彦氏、「古今的世界の終結」とする菊池靖彦氏らがあり、一方、『後拾遺和歌集』を「平安和歌の屈折点」とする後藤祥子氏、和泉式部の作品をもって「和歌史の転換期」とする鈴木日出男氏らがあって、前記②の考察はその妥当性を客観（統計）的に確認するという意義があった⁽⁴⁾。加えて、修士論文で試みた「短歌における句切れの認定基準私案」を『拾遺和歌集』の短歌についても試験的に適用し、相応の成果が得られたことを論述した。

この博士学位申請論文は受理され、審査過程に回されることとなった。審査の過程で、審査委員の指摘に基づいてリライトをしたが、その後大学側の審査環境が変化し、その影響や諸事情により、残念ながら学位の申請を自主的に取り下げるという結果になった。この一連の動きの中で、筆者の体力はかなり消耗し、学習に要する資金の余裕にも陰りがでてきた。老後の学習には、冒頭に述べたように「心身の無理を避ける」必要があることを痛感したところだ。

おわりに——人生を越えるために

そろそろお申し越しの枚数も残り少なくなってきた。筆者も来春には 75 歳を迎える。一段落したので、今後残された人生でしたいことが二つあるので、それをあげておく。

第 1 は、ライフワークとして和歌の研究、実作はこれからも続けていきたい。具体的な目標として、①資金上の目途がつけば、いったんは書き上げた研究論文を再編集して出版にこぎつける、②HP（ホームページ）、サークル（結社）を立ち上げ、実作発表の場を確保する、③歌の研究や実作が世間の目に留まり、それを続けるために後継者の育成を心がけたい。

第 2 は、ボランティアをしたい。この真夏の 1 か月間、高齢の叔母の介護を受け持った。単身生活の中で、彼女は、耳が遠く大声で話すようになり、疑い深く、認知症気味で判断力もいささか低下していた。「はじめに」で触れたように、「老後といえども元気な人は介護する側にまわる」と提案したが、このことは、なまかな決意や知識では実行できないことを思い知らされた。それよりむしろ、日常生活の中で、自らの身体能力を鍛え直し、精神を解放して気分を明るく持ち続け、できることなら、他人の介護を受けずに人生の終焉を迎えられるようトレーニングに励むことを目指したい。

<注>

- (1) 松田武夫「修辞法の再検討「句切れ」」『月刊文法』1969 年 2 月。
- (2) 大久保忠利『増補版 日本文法陳述論』明治書院、1982 年、444, 445, 450-452 頁。
- (3) 次田香澄『玉葉集風雅集攷』笠間書院、2004 年、37, 60, 161 頁；岡野弘彦「紀宮さまを寿ぐ歌」『読売新聞』夕刊、2005 年 11 月 15 日、文化蘭記事。
- (4) 小町谷照彦「拾遺集研究の現段階と展望」小沢正夫編『三代集の研究』明治書院、1981 年；菊池靖彦『古今的世界の研究』笠間書院、1980 年、58-96 頁；後藤祥子「平安和歌の屈折点—後拾遺の場合」和歌学会編『和歌文学の世界』第 2 集、笠間書院、1974 年、98-103 頁；鈴木日出男『古代和歌の世界』筑摩書房、1999 年、183-185 頁。

浅岡 純朗 (あさおか・すみあき)

1937 年神奈川県生まれ。私立桐朋高校卒業、東京都立大学人文学部国文科卒業。1959 年厚生省入省、社会保険庁年金指導課長、同社会保険庁地方課長を経て 1994 年に退官。現在、東京都社会保険労務士会常任理事。2004 年二松学舎大学大学院博士課程に進学し、2009 年同後期課程単位取得退学。和歌の研究と実作をライフワークとしている。全日本大学開放推進機構会員。